

天疱瘡ニ就テ：附 瘙痒性天疱瘡ノ一例

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/30696

原著

天疱瘡ニ就テ附癢痒性天疱瘡ノ一例

金澤醫學專門學校皮膚科教室(主任土肥博士)

河村金次

一、序言

天疱瘡ハ極メテ稀ニ見ル皮膚疾患ノ一ニ屬シ内外國ヲ通ジ其報告例モ甚ダ多シト云フベカラズ、最近ニ至リ吾ガ教室ニ於テ癢痒性天疱瘡ノ一例ニ遭遇セシヲ以テ其一例報告ヲ兼テ天疱瘡ニ就キ少シク記載セントス。

抑々天疱瘡ヲ初メテ記載報告セシハ實ニソワージユ氏ナリトス、然レドモ當時ハ單ニ水疱形成皮膚疾病ノ義ナルノミニテ未ダ其本態及ビ原因ニ關シテハ研究尙充分ナラズ、全ク未知ニ屬シ其意義タルヤ頗ル不徹底ノ觀ナシトセザリキ、其後ヘブラ氏出デテ本症ハ水疱形成ト同時ニ經過ノ極メテ慢性ナルヲ特徴トナシ漸ク其意義明瞭ニ近ヅクニ至リタレド其本性原因ニ就キテハ今日尙不明ノ域ヲ脱スル事能ハザルナリ。

(1)

二、實 驗 例

原著 河村金次天疱瘡ニ就テ附癢痒性天疱瘡ノ一例

患者、淺井某男、六十七才、農業、初診大正九年六月二十一日。
家族史及遺傳的關係。

兩親ハ不明疾患ニテ既ニ死去シ、同胞八人ニシテ患者ハ其長男ニ生ル、三女ハ十五年前子宮疾患ニテ死シ三男ハ戰死ヲ果ケ他ハ凡テ健存ナリ、子女二名ハ共ニ健在ス。先妻二名アリ一名ハ不明ノ熱病ニテ斃レ一名ハ「チフス」ニテ死亡セリ、後妻ハ極メテ強健ナリ、家族間ニハ同様ノ皮膚疾患ナク其他親縁中ニモ結核症、腫瘍、神經病等ノ遺傳的素因アルヲ認メズ。

既往症。 生來頑強ニシテ疾病ヲ知ラズ、勿論梅毒、淋病等ノ傳染的疾患ハ絶對ニ否認セリ。

現病歴。 約二年前ヨリ何ヲ原因ナクシテ兩側下腿ニ浮腫ヲ來シ腹壁緊

滿、全身倦怠ヲ感セシモ何ヲ意ニ介スル事ナク依然トシテ仕事ヲ繼續シ居タリ、昨年十二月ニ至リ顔面兩側頰部ニ癢痒性皰癩性發疹生ジタルニヨリ當時某醫ノ診療ヲ乞ヒ脚氣ナリトテ該局部ニハ黑色ノ軟膏ヲ貼用セリ、其後同所ニ數個ノ小豆大ノ水疱ヲ生ジ遂ニ増大シテ小兒手拳大ニ達セルモノアリ、下腿外側ニモ同様ノ水疱ヲ生ズルニ至リ益々増悪慢延ノ傾向ヲ示セルヲ以テ兩側下腿ハ和倉ノ鱗泉ヲ温メテ之レヲ浴シ傍ラ醫ノ軟膏ノ貼用ヲ怠ラザリキ然レドモ何ヲ効果見エズ次第ニ兩側上肢、胸部、背部等ニモ慢延シ愈々不良ノ狀ヲ呈スルニ至リタレバ今年三月二十二日又他醫ニ轉ジ入院加療ヲ受ケ局所ニハ繃帶ヲ施サレタリ然ルニ二三日後ニ至リ殆ド全身至ル處ニ水疱ノ發生ヲ見ルニ及ビ再ビ他醫ニ趣ケリ、四月四日頃ハ最も高度ニ増悪ノ狀態ヲ呈シ癢痒劇甚安眠不可能ニシテ且ツ水疱ハ搔爬ノ爲メ破綻シ赤色糜爛面ト黒褐色色素沈着トノ爲メ皮膚面甚ダシク醜惡ナリシモ軟膏貼用ニヨリ水疱叢生漸ク減少シ糜爛面モ次第ニ治癒ニ向ヒ四月下旬頃ヨリ少シク輕快ノ傾向ヲ示シ間モナク全ク健康狀態ニ復セリ然レニ五月十四日入浴後風邪ニ犯リ發熱三十七度三十八度ヲ上下セシ事アリシモ之レ又直チ

ニ治シタレバ再ビ入浴ス、然ルニ四肢、胸部等ニ浸潤ノ強キ赤色發疹無數ニ發生シ癢痒及ビ疼痛交々アリ中央ニハ化膿ヲ見ルニ至リタレバ醫ノ治療ヲ乞ヒ灰白色ノ軟膏ヲ貼シ繃帶ヲ施サン間モナク治シタリ、當時晝夜ノ別ナク全身ニ癢痒感アリ搔爬ニヨリ小皰癩樣物無數ニ生ジタリト云フ、六月中旬ヨリ再ビ頸部兩手等ニ癢痒アル水疱生ジタレバ二十一日入院治療ヲ乞フ可ク本科ニ來ル。

現症。 体格極メテ優等、筋骨皮下脂肪組織共ニ善ク發育シ全身皮膚色

一般ニ淡褐黃色ニシテ眼瞼結膜ト共ニ極メテ貧血性ナリ、口腔粘膜炎常ニシテ舌ハ少シク白苔ヲ被ル頸腋肘腋ニハ異常ナキモ兩側鼠蹊腺ハ鶏卵大無痛性ノ腫脹アリ、兩側下腿及ビ顔面ニハ輕度ノ浮腫ヲ認ム、內臟諸臟器ニハ異常ナキモ全身倦怠、食思減少、癢痒、惡寒等ノ自覺症ヲ訴フ、便通排尿尋常体温三十七度一分、脈膊正調一〇六ヲ算ス發疹ノ狀態ハ胸部背部四肢間ハ最も甚ダシキモ殆ド全身至ル所ニ小ナルハ半米粒大ヨリ大ナルハ大豆大ニ及ブ圓形緊縮セル單房性ノ水疱無數ニ存在シ多クハ孤立性ナルモ所ニヨリテハ數個癒合シ不正形ノ大水疱トナリカ、ルモノハ被膜施緩シ表面淡褐色ニシテ之レニ觸ルレバ容易ニ破綻シテ水樣透明ノ液ヲ漏ラス、水疱ノ底面ハ平滑ニシテ赤色ノ糜爛面ヲ現ハシ少シク拭取スルニ出血シ易シ、糜爛面ハヤガチ乾燥シ淡紅白色ノ斑トナリ次第ニ淡褐色ノ色素沈着ヲ以テ治癒ス、其他所々ニハ膿疱アリ血腫アリ又痂皮等モ見得ベク、反覆スル水疱發生ニヨリテ皮膚肥厚ヲ來シ殊ニ四肢ニ於テ最も甚ダシク以上ノ水疱糜爛面、色素沈着斑等ニヨリ皮膚色甚ダシク汚穢觀ヲ呈ス。

其他種々ノ検査

一、水疱内容液 極メテ新鮮ナル一水疱ヲ「アルコール」、「エーテル」ニテ拭取殺菌シ之レヲ破リテ得タル内容液ヲ肉糞汁培養基五本ニ培養セルモ何レモ細菌陰性ニ終レリ其他鏡檢的ニモ勿論細菌ヲ証明シ得ザリキ。

二、検査 弱酸性反應比重一・〇二〇糖、蛋白質陰性「インテガン」中等度ノ陽性血球細菌上皮及び圓摺等ヲ証明セズ淡褐色透明ノ尿ナリ。

三、糞便淡黃褐色ノ消化便、中等度ノ硬度アリ、寄生虫卵血球上皮等ヲ認ムル能ハズ。

四、血液所見 患者ノ耳垂ヲ穿刺シテ得タル血液ニ就キ綿引氏液ヲ以テ染色シ白血球ヲ檢スルニ、白血球一六〇〇。

白血球ノ種類ハ中性多核白血球五七%、大單核白血液五%、淋巴球一七%、移行体三%、「エオジン」嗜好細胞二〇%、「マススト」細胞〇・四%、其他細菌ヲ証明セズ。

五、ワツセルマン氏反應陰性。

六、組織的鏡檢所見 患者ニ乞ヒテ上腿ノ皮膚一片ヲ切除シ之レチ「アルコホール」固定「パラフィン」埋没法ヲ行ヒ「ヘマトキシリン、エオジン」染色ヲ以テ鏡檢スルニ所見次ギノ如シ、角質層ハ極メテ薄スク其痕跡ヲ留メ水疱被膜部ニハ之レチ缺如ス、水疱部位ニ於テハ顆粒層及ビ有棘細胞ノ一部ハ水疱内容ノ爲メニ壓迫セラレ凡テ扁平ノ膜トナリテ水疱ノ皮膜ヲ形成シ有棘細胞間隙ハ殆ド見ル事不可能ナリ、其他ノ有棘細胞及ビ基底層細胞ハ水疱底部ヲナシ全ク其原形ヲ失ヒ極メテ不整形ヲ呈シ或物ハ全然認別シ得ザルモノアリ、且ツ其配列不規則ナリ又上皮層ノ處々ニハ大ナル色素細胞ノ散在スルヲ見ルベシ、之レニ依テ觀ルニ本症例ノ水疱發生ハ有棘細胞層内ニ生ヅタルモノナルハ明瞭ナリトス、又水疱下部ニ位スル真皮ノ上層ニハ輕度ノ小圓形細胞ノ浸潤アリ水疱ハ全ク單疱性ニシテ内容物ハ一般ニ纖維素網狀ヲナシテ存シ其處々ニハ主トシテ數多ノ單核白血球及ビ「エオジン」嗜好細胞等幾多存在シ又上皮細胞ノ脱落セルモノモ認知セラル、汗腺皮脂腺、毛細管ノ擴張アリト云フモノアルモ

本標本ニハカ、ル部位加入セズ、遺憾ナガラ之レヲ見ル能ハザルヲ恨ム。

經過及ビ治療

六月二十一日(入院)水疱ヲ破リ全身ニハ二%「ビチロールウキルソン」氏軟膏ヲ貼用シ内服ニハ健胃強壯劑ヲ與フ、二十五日体温三八度四分癩痒一層劇甚トナリ水疱發生ノ數頗ル增加ス、胸部背部ニハ紅斑アリ、二十七日軟膏塗布貼用朝夕二回トス、自家血清二〇cc靜脈内注射ヲ行フ、患者再ビ採血サル、ヲ不望、同療法一回ノミニ終レルヲ遺憾トス。七月五日自家血清療法ノ失敗ニ鑑ミ健康人血清二〇cc靜脈内注射ヲ行フ、然レドモ其後再ビ同血清得ラレズ經過ノ如何不明ナリ、七月九日以上ノ療法ニテ何ラ効果見エズ、依然トシテ水疱發生癩痒劇甚ヲ持續ス、依テ上半身ニハ二%、下半身ニハ五%「ビチロールウキルソン」氏軟膏ヲ塗布シ内服ニハ強心劑ヲ加フ、七月十二日全身ニ五%ノモノヲ塗布ス、十五日少シ軟膏ノ爲メ刺戟症狀ヲ呈セルニヨリ二%ノモノトス、尙内服ニハ乳酸「カルシウム」ヲ混ズ、七月十七日依然トシテ効果ナシ食慾不振癩痒ノ爲メ睡眠不足アリ身体次第ニ羸瘦シ來ル臆症狀ナシ、七月十八日軟膏ノミニテハ効果見エザルヲ以テ「リゾール」浴ヲ行ハシム(一日一回一浴一〇グラム)溶解其他前法通りナリ。二十二日「リゾール」浴ニテ氣分爽ナリト云フ依テ連日持續セシムル事トセリ但シ水疱發生未ダ止マザルモ水疱小ニシテ發生少シク減少ノ傾キアリ糜爛面ノ治癒頗ル速カナリ癩痒尙甚ダシ、三十日水疱發生極メテ少ナク糜爛面ハ淡紅白色斑トシテ跡ヲ留メ皮膚ノ肥厚稍々軟トナル、八月七日「リゾール」浴ニテ患者元氣ヲ増シ水疱ノ發生益々減少シ背部ニハ全ク見ル事能ハザルニ至ル八月九日糜爛面殆ド認メラレズ亞鉛華硼酸軟膏ノ貼用ノ必要ナキニ至ル、癩痒感モ次第ニ減シ晝間ハ殆ド感セズ夜間ハ輕度ニ自覺ス、「リゾール」浴以前ニ於テハ晝夜ノ差別ナク劇烈ナル癩痒ニテ附添者ヲ困却

(4)

セシメ又安眠ノミナラズ殆ド一睡ダニ能ハザリシニ比スレバ「リゾール」浴
實行後ニ於ケル經過ハ極メテ長効ナリト云フ可ク水疱發生減少ト共ニ本症
ニ於テ「リゾール」浴ノ有効ナリシ事實ハ亦認め得ベキナリ、然レドモ尙全

治ニ至ラザルヲ以テ「リゾール」浴ノ持續、軟膏ノ塗布等ト共ニ今後ノ經過
觀察セントスルハ勿論ナリトス。

三、天疱瘡ノ一般症狀

本症症狀ニ就キテハ既ニ成書ニ詳細ナル記載アリテ今更喋々ヲ要セザレ共普通常態ノ皮膚時ニ稍々紅斑ヲ帶ブル皮
膚面ニ鳩卵大マデノ水疱發生シ一消一長經過慢性ニシテ斷續發生シ濃淡種々ノ色素沈着或ハ表皮剝脫アリ、且ツ水疱
發生ノ部位不定ニシテ内容中ニ細菌ヲ存セズ、又水疱治癒後癢痕ヲ留メザルモノヲ總稱ス、從ツテ其症狀モ亦多種多
様ナリト雖モ之レヲ大別シテ良性及ビ悪性ノ二種トナス、即チ良性ナルモノハ豫後比較的良好ニシテ全然治癒スル事
アルモノニシテ尋常性天疱瘡及ビ瘡痒性天疱瘡ハ之レニ屬ス悪性天疱瘡トハ劇シク且ツ迅速ニ全身障礙ヲ來シ水疱底
ノ悪性變化及ビ粘膜炎ヲ犯スモノ之レニ屬ス即チ葉狀性天疱瘡實扶的里性天疱瘡粘膜炎天疱瘡及ビ増殖性天疱瘡ノ如キヲ
云フ、而シテ瘡痒性天疱瘡ハ學者ニヨリ或ハ良性ニ數フルアリ或ハ悪性ニ算入スルアリ一定セザレ共多クノ學者ハ良
性ニ編入スルモノノ如シ、要スルニ之等ハ全身症狀、豫後經過ノ如何ニ關スル處ニシテ實際ニ於テモ稀ニ良性ナルモ
ノノ悪性天疱瘡ニ轉ズルモノアルト共ニ悪性天疱瘡ヨリ良性ノ尋常性天疱瘡ニ變化スルコトモ絶無ナリト云フベカラ
ザルナリ。又瘡痒性天疱瘡ハ「ヂューリング」氏瘡疹狀皮膚炎ト同一視スルアリ又全然異系ト認ムルアリテ一定セズ。
天疱瘡ニハ前記ノ如キ種々ノ症狀アリテ一種ノ疾病ヲ以テ目シ難キモノアリ、即チカボシイ氏ハ天疱瘡諸種ノ症狀
ハ其時期ニアルモノトナシ、ナイセル氏ノ如キハ全然之レニ反對スル處ナルモ、一般現今ニ於テハ尋常性、葉狀性及
ビ増殖性等ノ他ノ天疱瘡モ亦凡テ同一物ト見做サルルガ如シ。

今試ミニ東京帝國大學、九州帝國大學及ビ金澤醫專等ノ皮膚外來患者統計表ヨリ本症ヲ摘録スレバ次ノ如シ。

(6)

ルマデノ本症報告例ヲ表記スレバ次表ノ如シ。

原著 河村ハ天疱瘡ニ就テ附淫痒性天疱瘡ノ一例

番號	性	年齡	發病年月	報告者	報告年月	病症例
21	男	四九	明治三十三年七月頃	鈴木	明治三十四年	尋常性天疱瘡
20	男	八	同 三十一年四月	同	同	同
19	男	一二	同 二十七年	岡村	同 三十六年	天疱瘡
18	男	三三	同 三十五年十一月	加納	同	尋常性天疱瘡
17	男	?	同 三十五年十月	遠山	同	淫痒性天疱瘡
16	男	五八	同 三十一年	遠山	同	天疱瘡
15	男	一一	?	土肥	同 四十一年	淫痒性天疱瘡
14	男	四八	同 四十一年八月	大越	同 四十二年	同
13	男	四三	同 三十七年四月	櫻根	同	増殖性天疱瘡
12	男	二三	同 四十二年十二月	荒井	同 四十三年	淫痒性天疱瘡
11	女	三三	同 四十年	旭野	同	増殖性天疱瘡
10	男	一八	初診ヨリ二十日前	中野	同 四十四年	天疱瘡
9	男	五五	大正元年四月	高橋	同 大正元年十一月	同
8	男	六三	同 元年五月	戸塚	同 二年十二月	淫痒性天疱瘡
7	女	四一	明治四十三年	志田	同 三年六月	同
6	男	四一	大正二年十月	井尻	同 三年九月	尋常性天疱瘡
5	男	三九	同 三年六月	同	同 四年十月	増殖性天疱瘡
4	男	四三	同 三年六月	同	同 五年八月	全身性天疱瘡
3	男	四三	?	荒木	同 五年三月	増殖性天疱瘡
2	男	二〇	同 四年五月	井尻	同 五年三月	尋常性天疱瘡
1	男	二〇	?	石原	同 六年三月	尋常性天疱瘡
?	男	四〇	?	同	同	尋常性天疱瘡

本諸例ハ予ノ涉録シ得タル「リテラツ」ノ範圍ナリ或ハ尙漏殘セル幾多ノ報告モ亦ナシト云フベカラザレドモ今本表ト前記三校ノ統計表トヲ比較スルニ本表ニ於テハ甚ダシク種々ノ天疱瘡ニ接スルヲ見ル即チ尋常性天疱瘡十五例、淫痒性天疱瘡九例、増殖性天疱瘡七例、葉狀性天疱瘡一例、尋常性兼葉狀性一例、尋常性兼増殖性二例ナリ、又之レヲ男女性別ニ分類スルニ男二十四名、女九名ニシテ男子ハ女子ヨリ遙カニ多數ヲ占ム、或ハ本症ハ本邦ニ於テ男子ニ多ク見ルモノナランカ、更ニ年齢的ニ之レヲ見レバ各年代ニ於テ之レヲ見得ラルベキモ殊ニ中年代ニ最モ多キガ如キ觀アリ、故ニ是レニ由ツテ之レヲ觀レバ性別的、年齢的ニハ何ラ意義ナシトスルモノ多クアレド亦注目スベキナリ、要スルニ今後幾多ノ報告ヲ俟テ愈々明確ニ達スベク尙大ニ研

35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22				
男	女	女	男	女	男	女	女	男	男	男	男	?	?				
六七	四二	三五	五一	三一	五五	四一	三七	五八	二二	三一	四	?	?				
同	同	?	?	?	同	同	同	同	同	同	同	?	?				
八年十二月	九年一月				三年十二月	七年八月	三年	六年	五年一月	六年十月	四年九月						
河村	遠山	同	同	泥谷	野口	森田	橋本隆敏	土肥章司	同	三木	伊與田	今村	坂木				
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同				
九年八月	九年二月			九年一月	八年三月	八年二月	七年十月	七年四月		七年十一月	六年九月		六年四月				
痒痒性天疱瘡	痒痒性天疱瘡	同	同	尋常性天疱瘡	増殖性天疱瘡	尋常性天疱瘡	増殖性天疱瘡	尋常性天疱瘡	葉狀性天疱瘡	天疱瘡	全身性増殖性天疱瘡	痒痒性天疱瘡(?)	増殖性變化アルモノ	全身性天疱瘡ニ多少増殖性變化アルモノ	増殖性變化ナ見	腋トニ多少増殖性變化ナ見	全身性天疱瘡

報告年月トハ本例記載雜誌ノ發行年月ナリ。

四、組織的所見及ヒ其病理

(7) 天疱瘡ハ臨床ニ其症狀種々ナリト雖モ解剖的組織ノ變化ニ至リテハ殆ト大差ナキヲ常トス、即チ水疱ノ位置ニ於テモ必ズシモ一定セズ孰レノ上皮層ニモ發生スルモノナリ、クロマイエル氏ハ上皮基礎層ヨリ發セルヲ報ジ、大越保氏ハ棘狀細胞層ニ在リト云ヒ、遠山氏ハ顆粒層ノ下部ニ生ゼシヲ實驗シ、ジモン、ルロア、ブロックノ諸氏ハ上皮層全

原 著 河村日天疱瘡ニ就テ附痒痒性天疱瘡ノ一例

究的餘地ノ存スルモノト堅ク信ズル所ナリ
今 Hishman 氏ガ最近五年間ニ治療セラレシ三十例ノ天疱瘡患者ニ就キ研究シ之レヲ病型ニヨリ左ノ如ク分類セラレタルヲ以テ予ノ得タル統計ト比較シテ參考ニ供サン。

病 症	Hishman		河 村	
	例 數	例 數	例 數	例 數
尋常性天疱瘡	一一	一一	一一	一一
痒痒性天疱瘡	一一	一一	一一	一一
増殖性天疱瘡	一一	一一	一一	一一
葉狀性天疱瘡	一一	一一	一一	一一
尋常性天疱瘡兼葉狀性天疱瘡	一一	一一	一一	一一
増殖性天疱瘡兼葉狀性天疱瘡	一一	一一	一一	一一
葉狀性天疱瘡兼増殖性天疱瘡	一一	一一	一一	一一
合 計	三〇	三〇	三五	三五
	男二 女一	男一 女七	男二 女四	男九 女不明

但シ前表ニ於テ單ニ天疱瘡トアルモノハ凡テ尋常性ニ加スルセリ

(8)

部ガ剝離シテ生ズトナシ、ヘブラ氏ハ水疱壁ハ角質層ナリト稱シ、ハイト氏ハ角質層ト網狀層トノ間ニ發スト云ヒ、カボシイ氏ハ水疱ノ位置ハ單ニ表面ニ近ク發生スト論ゼリ、戸塚氏ハ基礎層或ハ乳頭層ニ生ズト記述セリ、予ノ例ニ於テハ棘狀細胞層ノ中間部ヨリ發生セルモノナル事明ラカナル所ナリ。

水疱ハ單房性ニシテ内容物トシテハ纖維素、上皮細胞、白血球、エオジン細胞等ヲ藏ス、解剖上最モ著明ナル變化ハ真皮ノ乳頭體ニ於ケル浮腫ニシテ血管怒張シ多少ノ單核白血球ノ浸潤ヲ見ル又鈴木、笹川氏ニ依レバ往々汗腺、脂腺等ヨリ發スル角性囊腫即チ粟粒腫ヲ認ムル事アリト云フ、尙附記スベキハ葉狀性及ビ増殖性天疱瘡等ノ如キ惡性ノモノナリ、之等ニ於テモ殆ド其病變相似タリト雖モ唯々比較的其症狀一般ニ高度ナルノミナリ、増殖性ニアリテハ種子層數倍ニ肥厚シ且ツ浮腫狀ヲ呈シ角層モ亦往々肥厚シ乳頭體ハ著シク增大スルヲ見得ラルベシ、井尻氏ハ増殖性天疱瘡ノ二例ニ就キ其組織的變化ヲ記シテ曰ク、其増殖性變化ハ主トシテ表皮及ビ真皮乳頭層ニヨリテ起リ、コハ摩擦作用ト種々ノ醗膿菌、寄生蟲等ノ外因ノ働クト共ニ其部位ニ於ケル血管淋巴管擴張及ビ從ツテ生ズル浮腫榮養過剩等ノ内因ト相俟ツテ起ル組織増殖ニ外ナラズ、而シテ其真皮乳頭層ノ増殖ハ表皮ノ夫レニ勝ル時ハ其變化漸ク乳頭樣ニ傾クト雖モ其炎性產物ナル事ハ勿論ナリト論及セリ。水疱發生ノ病理ニ關シテモ其說ク所區々ニシテ未ダ一定セズ、クライビッヒ氏ハ真皮ノ上部ニ於ケル急性炎症ナラント述べ之レヲ説明シテ曰ク、其兆ハ臨床上ノ紅斑、組織上真皮及ビ水疱附近ノ充血浮腫、圓形細胞ノ浸潤等ヲ以テ推意ストナス、ヤーリッシュ氏ハ單ニ機械的作用其主ナル原因ナリト云ヒ即チ液体滲出甚ダシキ爲メ上皮細胞相互ノ間若シクハ上皮ト真皮トノ連絡弛緩シテ生ズトナス。又ルイトレン氏ハ真皮ノ彈力纖維ハ表皮ノ基礎層ニ入りテ兩層ヲ連絡スルガ故ニ尋常ノ皮膚ニアリテハ表皮ヨリ剝離スル事ナキモ天疱瘡ニ於テハ此ノ彈力纖維ガ乳頭層ニ於テ既ニ消滅シ居ルヲ以テ表皮剝離ヲ來スナリト雖ドモヤーリッシ氏鈴木弘道氏等ノ實驗ニ於テ彈力纖維ニ變化ナク兩氏ハ之レニ反對ヲ示セリ。又ポリエー、ラポア氏等ハ原因ヲ皮膚神經ノ炎症ニ歸シ、或ハ先天性ニ表皮剝離ノ傾向アルモノニシテ血管壁ヨリ漿液ノ滲出スル場合ハ機械的ニ水疱ヲ發スル事尙

火傷ニ於ケルガ如シト述べ、戸塚氏ハ單ニ滲出液ノ過分泌ニヨリ抵抗少ナキ皮膚ノ或層ニ滯留スルモノナリト論ゼリ。之レヲ要スルニ前記諸氏ノ唱フル所ハ殆ド凡テ假想說タルヲ免レズ故ニ其病理ニ就キテハ本症ノ發生原因ト共ニ今後猶幾多ノ研究ヲ要スベキハ論ヲ俟タザル所ナリトス。

五、天疱瘡ノ發生原因

天疱瘡ノ原因ニ關シ諸說種々アレドモ多クハ想像的ニシテ未ダ全ク不明ニ屬スト雖モ之レヲ大別シテ四トナス。

神經說。榮養神經障礙ニヨリテ種々ノ皮膚疾患ヲ惹起セシメ得ルガ如ク本症モ亦神經系ノ障礙ニ基因ス即チ中樞

及ビ末梢神經系ノ損傷或ハ疾病、例ヘバ脊髓炎、腦膜炎、片癱癩病、脊髓空洞症、歇斯的里等ニ水泡ヲ發スルコトヲ以テ論據トスルニアリ、岡村氏ハ三歳ノ頭腦膜炎ニ罹リ同時ニ癩痒性天疱瘡ニ罹患セルヲ見タリト一例報告アリト雖モ之レヲ以テ直チニ神經說ヲ信ジ難ク先年土肥(章司)教授ノ報告ニ於ケルガ如ク多クハ臨床上、解剖上、神經系ノ病的變化ヲ認メ難キヲ常トス。

遺傳說。遺傳的素因アルモノニ本症ノ發生ヲ見ルト說クモノアレドモ臨床上カカル場合ニ接スル事極メテ破格ニ屬シ且ツ其唱フル所ノ根據極メテ薄弱ニシテ吾ガ教室ニ於テ實驗セル一例ニ於テモ亦予ノ本例ニ於テモ遺傳的關係アリト認メ得ラルベキ何物ヲモ有セザリキ。

傳染說。リプシュツ氏ハ八例ノ天疱瘡水泡内容液中ヨリ二種ノ微生物即チ「チラストプラスメント」及ビ「アナブラスマ、リベルム」ヲ發見シ之レ本症ノ病原ナリト論及ス、其他フニシヤー氏ハ「ザルヴァルサン」ニヨリテ治癒セル本症例ヲ舉ゲ「ザルヴァルサン」ニ依リテ輕快スル見地ヨリ本症ハ一種傳染性疾病ニ外ナラズト論斷ス、其他或ハ球菌或ハ桿菌最近ニ至リテ「スピロヘーテ」等ヲ發見シ之レ本症ノ原因ト看做シ傳染說ヲ稱フルモノアレド恐ラクハ偶然混入ニ過ギザルベク臨床上正確ナル本症發生ノ狀態ト嚴密ナル細菌學的處置ノ下ニ行ヘル試驗成績ニ於テハ常ニ水泡中ニ毫

モ細菌ヲ證明セズ、又水疱内容ノ移植試験ハ毎回陰性ニ終ルモノナリ、吾ガ教室ニ於テモ土肥教授、森田隼三氏ノ二例及ビ予ガ本例ニ於テモ細菌ハ全然陰性ニ終レリ、故ニ以上ノ事實等ヲ綜合觀察スレバ本症ノ傳染的ナルヲ否定シ得ラルベキヲ信ズルナリ。

中毒説。

カール、ブルック氏ハ尋常性天疱瘡ノ水疱内容液ニ就キ研究シ細菌性毒素即チ「チストレプトリジン」ノ存在ヲ證明セリ、氏ハ本毒素ヲ以テ天疱瘡患者ニ接種ヲ行フ時ハ暫時ニシテ天疱瘡發疹ヲ緩解セシメ得ルトナシ之レ唯一ノ本症原因ト看做ス、依ツテ吾ガ土肥(章司)教授ハブルック氏ノ成績ニナラヒ毒素ノ有無ヲ検査セントシ二回動物試験ヲ行ヒタルモ何レモ全ク陰性成績ニ終レリ、其他傳染性疾患後ニ殘存スル毒素ノ中毒或ハ自家中毒ヲ以テ本症原因トスル者アレドモ何レモ實驗成績陰性ニシテ未ダ證明セラルルニ至ラズ、又血液中及ビ水疱内容中ニ於ケル「エオジン」嗜好細胞ノ著シキ増加ガ本症中毒説ニ對シ有意義ノモノト稱スル者アレ共同細胞ニ對スル現今學説ハ尙不明ナルヲ以テ未ダ確實ナル論據トナスニ足ラザルナリ。

六、治 療 法

天疱瘡ハ其原因未ダ發見セラルルニ至ラザルヲ以テ其治療モ亦確實ナルモノナシ、從ツテ現今ニ於テ主トシテ行ハルルモノハ唯々對症療法ニ依ラザルベカラズ、即チ對症の治療法ニ依リテ患者ノ苦痛ヲ除去シ、二次的ノ傳染ヲ豫防スルト同時ニ患者ノ榮養ヲ補益シテ病症ノ輕減ヲ期セザルベカラズ、今此目的ヲ分チテ二トナス、其一ハ全身療法ニシテ他ハ外用療法ナリトス。

内服療法トシテ最も多ク用ヒラルルモノハ亞砒酸ノ内服ナリトス、然レ共時ニハ一%亞砒酸曹達液ヲ隔日一筒又ハ「アトキシール」一日五密瓦ノ皮下注射ヲ代用シテ一時效ヲ奏スル事アリト云フ、其他乳酸「カルシウム」臭素劑、鐵劑、肝油或ハ「キニーネ」ノ内服又ハ注射ヲ用フル事アリ、勿論患者ノ全身症狀ニ注意シテ適當ノ藥劑ヲ與フ可キハ今更喋

々ヲ要セザル所ナリ。外用療法ニハ種々アリ。先ヅ水泡ハ之レヲ穿刺シテ内容ヲ洩ラスベク疱膜ハ決シテ剪除スベカラズ、之レ殘存セル疱膜ハ能ク再生セル表皮ヲ保護スルガ故ナリ、水泡ヲ穿刺シテ内容ヲ洩ラサバ亞鉛華硼酸軟膏ヲ貼用スルカ又ハ亞鉛華油ヲ塗布スベシ伊藤氏ハ又葉狀性天疱瘡ニ大黃亞鉛華油ヲ用ヒテ有效ナリシ一例ヲ報告ス、アレキサンデル氏ハ二例ノ天疱瘡ニ「ビオホルム」ヲ粉末或ハ軟膏トシテ貼用又ハ撒布シ奏效アリシヲ記載セリ、其他炎症症狀著明ナル場合ニハ一〇%プロウ氏液又ハ二%硼酸水ノ罌法ヲ行フベキナリ、其他特殊ノ療法トシテ行ハルルモノニハ次ギノ如キ諸法アリ。

温浴療法。 本法ハ主トシテ病的產物ヲ除去シ得ルト同時ニ患者ヲ爽快ナラシメ併セテ繃帶交換ヲ容易ナラシムルノ利アリ、現今最モ行ハレツツアルハ硫肝、過滿俺酸加里、昇汞、糠、單寧酸、明礬及ビ「リゾール」浴ナリトス、ヘブラ氏ハ不斷浴ヲ賞用シ患者ヲ始終浴槽中ニ安臥セシメタリト雖モ必ズシモ之レヲ要セザルベシ、唯々温浴ハ一時的ナラズ持續的温浴トシテ入浴セシムルヲ要ス、予ハ上記ノ患者ニ對シ「リゾール」十瓦ヲ一浴中ニ投ジ毎日二十分間入浴セシメ十日後ニ至リテ劇甚ナル癢痒ニヨリ安眠全ク不可能ナリシモノガ殆ド癢痒感ヲ訴エザルニ至リタルノミナラズ同時ニ水泡發生減退シ極メテ奏效セルヲ實驗セリ。

注射療法。 本法モ亦天疱瘡ニ特有ナルモノニアラザレドモ近時皮膚科領域ニ於テ最モ廣ク用ヒラレ本症ニモ其應用ヲ見ルニ至レリ、從ツテ其注射液ニモ種々アリ又臨床的實驗日猶ホ淺ク其作用ニ對スル説明モ亦甚ダシク明瞭ナラズ有效無效未ダ一定スル所ナク殆ド疑問裡ニ逍遙スルモノナリ、今其文獻上ニ表ハレタル諸法ヲ記サンニ、

G. Praetorius 氏ハ千九百十年ニ報告セルリンゼル氏ノ方法ニ依リ重症ノ天疱瘡ノ患婦ニ其夫ノ纖維素ヲ脱セザル血液ニ〇.〇〇ヲ一回ニ注射シ根治セシメタリ、其有效成分ハ唯々血清ノミニ留ラズ血球「プラスマ」細胞モ亦與カルモノニシテ是等物質ガ血管内ニ入り暫時ハ生活狀態ニ居リ自己ノ固有ノ機能ヲ續行シ之レニヨリテ生ゼル產物モ亦有效成分ノ一部ヲナスモノニシテ即チアブデルハルデン氏ノ所謂抗毒素ニ似テ其作用ハ或種ノ有害ナル新陳代謝中間產物或ハ内

(12) 分泌腺ノ異常分泌物ヲ破壊スルモノナラント説述セリ。

Linser, Sahnstein, Zumbusch, Kee, 淺見、井尻ノ諸氏ハ自家血清若シクハ健康人血清ヲ靜脈内或ハ皮下ニ注射シテ有效ナリシト稱シ Tommasi 氏ハ家兔血清ヲ使用シテ幾分輕快セシメ得タリト報告アルモ Ullmann, Stumpke, Gottheil u. Sahnstein, Fordyce, 及ビ土肥(章司)博士ノ諸氏ハ全然無効ニ終レリト云フ、予ハ本法ニ依ル病症ノ經過ヲ觀察セント希望セシモ唯一回ノ自家血清及ビ健康人血清ノ注射ヨリ行ヒ得ザリシヲ以テ其效果ノ如何ニ關シテ報告シ得ザルヲ遺憾トス。

Holobut u. Lewartowicz 兩氏ハ水泡内容液ヲ注射シテ種々ノ效果ヲ研究セリ即チ兩氏ハ尋常性天疱瘡患者ニ溷濁セザル當該患者ノ大水疱ヨリ其内容ヲ吸出シ三十分間五十六乃至五十八度ニ加温シタル後培養試験ヲ行ヒ二十四時間後ニ於テモ何ラ菌ノ聚落ヲ認メズ全ク無菌ナルコトヲ證シ然ル後ニ同液ニ〇・五%ノ割合ニ石炭酸ヲ加ヘタルモノヲ注射シ以テ全身状態ノ恢復速カナリシ一例ヲ報告記載セラル、又近時諸種皮膚疾患等ニ對シ生理的食鹽水ヲ靜脈内ニ注射シ其淨血作用ヲ利用シテ癢痒其他ノ諸症狀ノ減弱セシメタル報告數多シト雖モ井尻氏ハ氏ノ實驗セル天疱瘡患者ノ四例ニ「キニーネ」食鹽水五〇〇〇瓦ヲ靜脈内ニ注射シ三例ニ於テ無効ニシテ其後一例ニ於テ顯著ナル效果アリシト記載ス。

Fischweiler 氏ハ五十八歳ノ天疱瘡患女ニ「ネオザルヴルサン」全量二一ノ靜脈内注射ヲ行ヒ全癒セシメタル一例ヲ報告シ、Fischer 氏ハ廿歳ノ患者ニ同劑(量數不明)ヲ臀筋内ニ注射シ入院後十九日ニシテ快癒退院シ而モ其後三ヶ月ニ至ルモ再發セザリシ一例ヲ記載セラル。

「クロールカルチウム」ハ特ニ皮膚疾患ニ對シ止痒分泌制止ノ作用顯著ナルハ皆等シク認メラル所ナルモ其靜脈内注射ニヨル效果如何ニ關シ報告例甚ダ少ナク論ズル事尙早ニ屬スト雖モ谷村氏ハ五十五歳増殖性天疱瘡ノ男子ニ三%「クロールカルチウム」二〇坵ツツ前後四回注射セルモ何ラ奏效ナカリシヲ記述ス、又遠山氏ハ本症ニ鹽化「カルチウム」

ノ注射ニテ好結果ヲ得タルヲ實驗セリト云フ、予ハ亦本患者ニ目下「クロールカルチウム」ノ靜脈内注射ヲ施行シ其狀態ヲ監視シツツアルモノナリ。

理學的光線療法。土肥、峯、土肥章司、庄司ノ諸氏ハ尋常性天疱瘡初期患者ニ水銀石炭燈照射反覆後水疱ヲ消滅セシメ且ツ數日間其續發ヲ豫防シ得タリト云ヒ、高柳氏ハ部位ヲ變更シツツ十五糎ノ距離ニ於テ十分間照射ヲ行ヒタルニ水疱内容吸收速カニシテ治癒セシメ得タリト記載アリト雖加納氏ニ依レバ氏ノ實驗症例ニハ之レヲ用ヒテ效果殆ドナカリシト論ズ。

之レヲ要スルニ原因不明ノ本症ニアリテハ特效的ニ作用スルモノ未ダ全ク不明ニ屬ス故ニ時ニ應ジ機ニ臨ミテ種々ノ治療法ヲ講ジ幾分ナリトモ病症ノ輕減ヲ期スルハ吾人臨床家ノ最モ必要トスル點ナリト信ズ、最後ニ増殖性天疱瘡ノ早期ニ於テハ乳頭狀増殖ヲ銳匙ヲ以テ搔爬シ烙白金ヲ以テ燒灼シ後療法トシテ沃度丁幾ヲ塗布スルカ又ハ過酸化水素水ヲ滴下シ硼酸水溫濕布繙帶ヲ行ヒ又ハ「デルマトール」、「オイグホルム」、次硝酸蒼鉛ノ如キ緩和軟膏ヲ貼布スベシ、粘膜性ノモノニアリテハ二―三%過酸化水素液ノ含嗽ヲ行ハシメ患部ニハ五%「クローム」酸水ヲ塗布シ其上ヲ硝酸銀桿ニテ擦過スベシ、又食事ノ際ニ於ケル劇痛ニハ每食前五%古加因水ヲ塗布スベキナリ。

結 論

一、本例ハ六十七歳ノ男子ニ見シ癩痒性天疱瘡ノ一例ナリ。

二、水疱内容液中細菌陰性、血液中「エオジン」嗜好細胞ノ増加、組織的ニ本水疱ハ上皮棘狀細胞間ニ生ジタルヲ見タリ。

三、男女性別的、年齢的、及ビ遺傳的等ノ關係ハ尙今後幾多ノ報告ニ俟タザルベカラズト信ズ、而シテ予ハ年齢的、遺傳的ニハ何ラ大ナル意義ノ存セザルヲ推意スル所ナリト雖モ文獻上ノ調査ヨリ觀察スルニ本邦ニ於テハ女子ヨリ

男子ニヨリ多ク實驗セラレタリ。

四、本例ニ對シ持續的「リゾール」浴ハ少カラズ鎮痒及ビ水泡發生ノ抑制ニ效果アリシ觀アリタリ。終リニ臨ミ恩帥土肥先生ハ予ニ本例ヲ貸與セラレ且ツ始終御懇篤ナル御教導ヲ賜ハリタルヲ深謝ス。

引用書目

- 1) 土肥慶藏氏、皮膚科學上卷。
- 2) 同氏、日本皮膚病徵毒圖譜第十九表。
- 3) 同氏、彩色皮膚病圖譜。
- 4) 鈴木弘道氏、天疱瘡ニ就テ(皮膚科及泌尿器科雜誌一卷一八九頁)。
- 5) 徳川氏、同討論(同上二一九頁)。
- 6) 土肥氏、數種ノ皮膚病患者ノ供覽(同上八四頁)。
- 7) 旭氏、同上(同上二卷一七三頁)。
- 8) 土肥氏、痒疹性天疱瘡患者供覽(同上三卷一〇三頁)。
- 9) 岡村氏、天疱瘡ノ患者供覽(同上)。
- 10) 加納氏、天疱瘡患者數例ノ説明及療法(同上三七四頁)。
- 11) 遠山氏、天疱瘡ノ二例及其組織所見(同上五二三頁)。
- 12) 同氏、葉狀性天疱瘡患者説明(同上四卷九〇頁)。
- 13) 土肥氏、瘰癧性天疱瘡患者供覽(同上八卷四九五頁)。
- 14) 大越氏、痒疹性天疱瘡(同上九卷二一〇頁)。
- 15) 荒井氏、痒疹性天疱瘡(同上十卷八一頁)。
- 16) 旭氏、増殖性天疱瘡ノ一例並ニ標本供覽(同上六四三頁)。
- 17) 櫻根氏、同討論(同上)。
- 18) 同氏、増殖性天疱瘡類似例(同上九卷二六五頁)。
- 19) 中野氏、患者説明(同上十一卷一一三八頁)。
- 20) 伊藤氏、葉狀性天疱瘡ノ一例附大黃ノ水泡ニ對スル効用(同上二〇三頁)。
- 21) 高橋氏、ヘブラ氏紅色皰癬疹、天疱瘡及ガネーリング氏瘰癧狀皮膚炎患者説明(同上十二卷一一五〇頁)。
- 22) 土肥氏、尋常性天疱瘡、ガネーリング氏瘰癧狀皮膚炎及先天性表皮水泡症ニ對スル水銀石英燈ノ治療(同上二六四頁)。
- 23) 土肥章司、庄司勝兩氏、水銀石英燈療法追加(同上十三卷第九號)。
- 24) 淺見氏、健康人血清注射療法ヲ施セル尋常性天疱瘡、乾癬、「パラプソリアーシス」(同上十四卷八一五頁)。
- 25) 井尻氏、痒疹性天疱瘡患者供覽(同上十四卷五七四頁)。
- 26) 同氏、ガネーリング氏瘰癧狀皮膚炎ト天疱瘡トノ關係(同上八九〇頁)。
- 27) 同氏、増殖性天疱瘡(同上十五卷八一〇頁)。
- 28) 荒木氏、尋常性天疱瘡患者供覽(同上十六卷七〇一頁)。
- 29) 石原氏、天疱瘡二例供覽(同上十七卷二四三頁)。
- 30) 坂本氏、全身性天疱瘡ノ「アモンストラチオン」(同上三五八頁)。
- 31) 井尻氏、尋常性天疱瘡患者供覽附其最近治療法ニ就テ(同上七九六頁)。
- 32) 今村氏、全身性天疱瘡ノ腋下ニ多少増殖性變化ヲ起セル患者供覽(同上)。
- 33) 三木氏、全身性増殖性天疱瘡患者供覽(同上)。
- 34) 櫻根氏、急性壞疽性天疱瘡(?)ニ就イテ(同上七三六)。
- 35) 伊與田氏、痒疹性天疱瘡(?)患者供覽(同上七九四)。
- 36) 三木氏、増殖性天疱瘡及葉狀性天疱瘡患者供覽(同上八卷七五八頁)。
- 37) 石原氏、葉狀性天疱瘡患者供覽(同上六九七頁)。
- 38) 旭氏、痒疹性天疱瘡(臨床講義)(同上八七七頁)。
- 39) 橋本氏、増殖性天疱瘡ニ就テ(同上八九七頁)。
- 40) 森田氏、尋常性天疱瘡ノ一例(同上十九卷一四一頁)。
- 41) 野口氏、増殖性天疱瘡ノ一例(同上二三六頁)。
- 42) 泥谷氏、尋常性天疱瘡ノ三例(同上二十卷五四頁)。
- 43) 遠山氏、瘰癧狀皮膚炎(痒疹性天疱瘡)(同上三三五頁)。
- 44) 土肥章司氏、血清療法(同上六七九頁)。
- 45) 土肥、栗田、兩氏、東京帝國大學皮膚科外來患者統計(同上第三卷四三三頁)。
- 46) 西川、齊藤、岡氏、同上、(同上第七卷二號)。
- 47) 土肥氏、同上、(同上第十

- 卷第七、八、九號。 ㊟ 淺田氏、九州帝國大學皮膚科外來患者統計(九大我教室ノ新築ト七年)。 ㊟ 關川、外四氏、同上、(九大開講十周年誌)。
- 50) 森田外二氏、金澤病院皮膚科新來患者統計(十全會雜誌第二十三卷第十號)。 51) 土肥章司氏、尋常性天疱瘡ニ就テ(中外九〇九號)。
- 52) 巨塚氏、淺澤性天疱瘡ニ就テ(醫報七ノ一)。 53) 井尻氏、増殖性天疱瘡ノ二例中一部増殖性變化ヲ起セシマヤエーリマンク氏泡疹狀皮膚炎ノ一例追加(醫學中央雜誌第二十二卷)。
- 54) Riecke, Lehrbuch der Haut- und Geschlechtskrankheiten. 55) Mracek, Handbuch der Hautkrankheiten. Bd. II. 56) H. Notnagel, Specielle Pathologie und Therapie. XXIV. Bd. I. 57) Joseph, Hautkrankheiten.
- 58) Ermann und Fick, Compendium der speciellen Histopathologie der Haut. 59) Fabry, Beitrag zur Klinik und Pathologie des Pemphigus foliaceus. (Archiv f. D. u. S. Bd. 70. Heft 2. 1904.) 50) Carl Bruck, Biologische Untersuchung bei Pemphigus vulgaris. (Archiv f. D. u. S. Bd. 93. Heft 3. 1908.) 61) Lipschutz, Mikroskopische Befunde bei Pemphigus vulgaris. (Archiv f. D. u. S. Bd. 119. 1914.)
- 62) W. Allen Jamieson and D. A. Welsh, Pemphigus vegetans. (British Journ. of dermatology. 1902. August.) 63) Alexander, Über die Viokornanwendung bei Pemphigus. (Therapie der Gegenwart. 1905.) 64) Lipschutz, Über einen mikroskopischen Befund bei Pemphigus vulgaris. (G. f. Bakt., Paras., u. Infek. 1910.) 65) G. Praetorius, Pemphigus malignus, durch einmalige intravenöse Blutinjektion geheilt. (Mhneb. med. W. Nr. 16. 1913.) 66) Holobut u. Leuontowicz, Versuch einer Pemphigusbehandlung mit dessen Bismutnachte. (Derm. W. Nr. 2. 1914.) 67) Maric Copellif, Bakteriologische Untersuchungen über Pemphigus. (Derm. W. Nr. 84. 1914.) 68) Eschweiler, Pemphigus vulgaris, Heilung durch Neosulfarsaminjektion. (Derm. Centralbl. XVII. Jahrgang. Nr. 9.) 69) Lipschutz, Über Protozoenbefund bei Pemphigus chronicus. (W. kl. W. Nr. 45. 1912.) 70) Highman, Pemphigus; a clinical study. (The Journ. of cut. dis. Vol. XXVII. Nr. 12. 1918.) 71) Fischer, Contribution to the therapy of pemphigus chronicus and of dermatitis herpetiformis Duhring. (Journ. of cut. dis. 1916. Ref. Derm. W. 1916.)